

IISEフォーラム2023 セッションレポート

スマートシティ 「未来をつくるパーパス都市経営」

このセッションでは、「未来をつくるパーパス都市経営」について議論しました。

登壇者は、慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授、慶應義塾大学 ウェルビーイングリサーチセンター長 前野隆司氏、国際社会経済研究所 研究主幹 西岡満代です。

（登壇予定であった前富山市長の森雅志氏は欠席となりました）

モデレータは国際社会経済研究所 ソートリーダーシップ推進部 部長 山田一宏が務めました。

本セッションのテーマである「未来をつくるパーパス都市経営」は、2023年1月に発刊した書籍（著者 西岡満代）のタイトルです。



「パーパス都市経営」とは？



国際社会経済研究所 研究主幹
西岡 満代

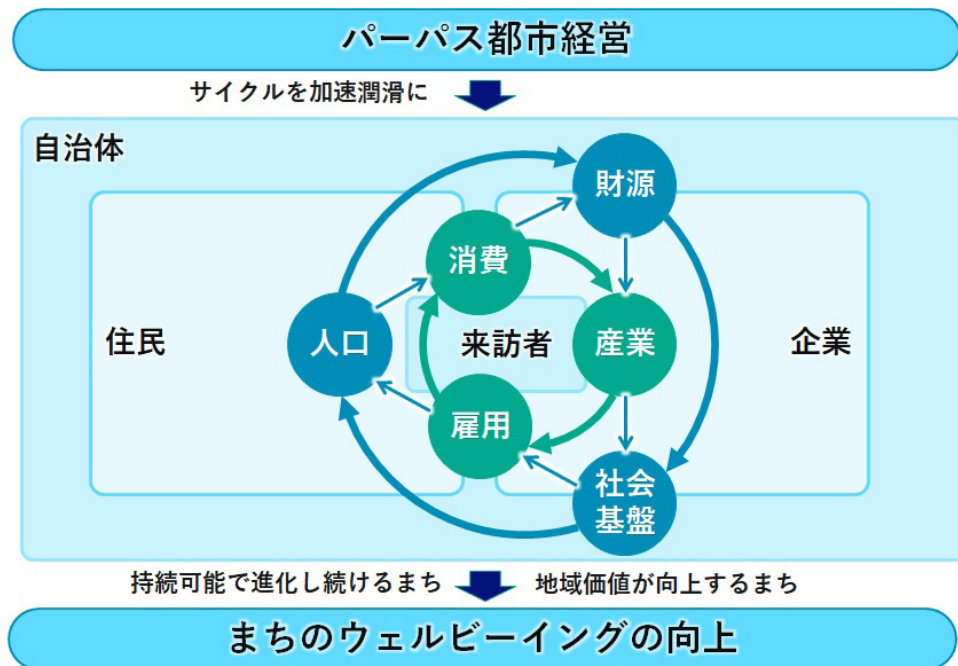
西岡：「パーパス都市経営」は「パーパス経営」と「都市経営」という2つの言葉の意味を合わせ持つ言葉として、新しく定義したものになります。

まちのパーパス（存在意義）となる「ウェルビーイングの向上」の実現に向けて、経営にこだわった視点を持ちながら持続的に回し続ける考え方です。

「パーパス都市経営」の実践により、まちの財源にプラスの効果を生み、社会基盤の維持や、雇用拡大や人口維持につながります。そして、税収が増え、また新たな財源が確保できるという経済の好循環を生み出し、まち全体の経済サイクルの加速・活性化によって、まちのウェルビーイングを高めることができます。

本セッションでは、「パーパス都市経営」の3つのポイントについて議論いたします。

まちの経済循環モデルとパーパス都市経営の関係性



まちのパーパスとしてのウェルビーイング

西岡：一点目は、人々が住み続けたいと思うような幸せが続くまちを「ウェルビーイングの高いまち」とし「まちのパーパス」として設定することです。

現在の人口減少、高齢化が加速する中、このまま何も手を打たないと、社会インフラや行政サービスが維持できず劣化し、人と人とのつながりまで希薄化するといった「暗い未来」が待っています。一方で、デジタル技術やデータを住民中心の目線で取り込むことで課題を解決し、人々がそのまちに住み続けたいと思うような「ウェルビーイングの高いまち」を目指す取り組みをしている「明るい未来」を描くこともできます。



慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科
教授
慶應義塾大学
ウェルビーイングリサーチセンター長
前野 隆司 氏

前野：ウェルビーイングとは、人々が健康で幸せで、社会の福祉が行き届いた“良い状態”のことですから、「まちのパーパス」にウェルビーイングを据えるのは非常に正しいと思います。

幸せな人は、生産性が3割高く、創造性が3倍高い、会社の欠勤率や離職率も低い、さらに健康長寿である等、様々な良いことがわかっています。

西岡：まちのウェルビーイングとは、個々人のウェルビーイングの高さの集合体であると考えていますが、特にまちづくりでは、自治体や住民、企業、教育機関や団体といった多様なステークホルダーで成り立っています。ウェルビーイングの向上と、多様なステークホルダーには相関があるのではないかと思います。

前野：ある研究では、知人の多様性が高い人は幸福度が高く、多様性が低い人は幸福度が低い傾向があるという結果が出ています。多様な人とインクルーシブに付き合うことで、多様な情報や意見が得られ、レジリエンスも高まり、イノベーションを起こして新しい世界をつくっていくこともできます。その意味で、多様性のある社会は非常にウェルビーイングが高いといえます。

経営的マインドでまちの戦略を選定していく

西岡：二点目は、まちづくりに経営的マインドを取り入れ、まちの特色に合わせた戦略を立て、施策を選択し、判断する、という点です。

富山市では、森前市長が人口減少・高齢化社会を見据えてコンパクトシティ政策を牽引し、「パーパス都市経営」の実践と言える取り組みで、財政とシビックプライド向上の両面で成果を挙げました。

富山市は、車を持って郊外に住む拡散型の都市ですが、これから人口が減少していく中では、まちの運営として効率が悪くなるため、「車がなくても楽しく暮らせるまちをつくる」という“戦略”を立て、まちの中心に公共交通等の投資を集中し、そこに自然に人が集まるようなまちづくりを実践してきました。

その結果、通常多くの都市でも市税の半分程度を占める固定資産税と都市計画税の総額が2020年までの10年間で13%増加。金額にして40億～50億の増収を達成。そのプラスになった税収を中山間部等の周辺も含めた全市民に還元するといったサイクルを生み出しています。

前野：企業は、目的が明確なため、従業員のウェルビーイングや製品を通じ、お客様のウェルビーイングを高めるにはどのようにすればよいか、企業におけるパーパス経営はかなり進められています。

ところが、地域では、基本的に住民がそれぞれの生活をしており、行政はその住民のことを支えるというのが従来の考え方であったため、まちにパーパスを取り入れる動きは、今まであまりなかったと思います。しかし、近年では行政がリーダーシップを発揮して、企業の経営のように、ウェルビーイングの向上を目指す動きが出てきた点は非常に重要です。

「地域では、従来、住民のウェルビーイングを高めることを目指していた」と思うかもしれませんが、なんとなく幸せになるといいなと思いながら行動するのと、ウェルビーイングの条件が何かを明示し都市経営を進めていくのは全く違います。

幸せの条件を満たすような都市経営を実践する富山市の事例は、「パーパス都市経営」だといえるでしょう。

西岡：経営的マインドについては、企業では、利益の増加や、製品の売上等、目標の管理ができるといった点も挙げられます。まちの場合は、税収の他、金銭的価値だけでは図れない「シビックプライド」のようなことも両方測れるようにモニターしていくことができます。このように、ウェルビーイングの向上という目標を持って持続的に回していくことも「パーパス都市経営」では提唱しています。

データ活用でウェルビーイングを測り未来へつなげる

西岡：三点目は、まちづくりを進める上で、ウェルビーイングの指標化等、データやデジタル技術を活用し持続的な仕組みをつくっていくことです。

前野先生は、様々な大学と連携して「地域のウェルビーイング指標」を開発し、「データを活用していか

前野：地域に住まう人が幸せかどうかを調べるためには、ウェルビーイングの状況を“健康診断”のように指標を用いて明らかにし、必要な施策を打つことが重要です。とはいっても、「全ての指標を高めましょう」ということではなく、まちの特性に応じて対応は様々あり得るでしょう。「地域のウェルビーイング指標」では、地域生活で幸せな条件を8つの幸せ要因と2つの不幸せ要因で表現しており、各々のまちが自分たちの強みを生かしていくためのヒントになれば、と考えています。

地域生活のウェルビーイング指標

	因子名称	定義
幸せ要因	ダイナミズムと誇り	地域の文化・芸術などが盛んで誇らしく感じる。 また地域に賑わいや躍動感があり、出会いや挑戦・成長する機会がある状態
	生活の利便性	日々の生活基盤（商業・医療・教育・交通機関・公共施設など）が整っており、利用しやすく不便を感じていない状態
	自然の体感	地域では自然（海・山・里山・川・湖等）が身近に感じられ、四季折々に向き合うことに喜びがある。また空気や水などが清浄だと感じられている状態
	居住空間の快適さ	自身の暮らす住居について、快適で過ごしやすく満足できている状態
	つながりと感謝	近隣住民に感謝し、良好な関係が維持できている。 気の合う仲間や助け合える知人がいる状態
	健康状態	自身は精神的にも身体的にも健康で、不安をあまり感じることなく、笑顔で過ごしている状態
	地域との相性	地域の街並みや風景に愛着を感じ、雰囲気が自分にとって心地よく感じられている状態
	地域行政への信頼	行政施策へ賛同し、納得している。地域政治のリーダーや行政を信頼できている状態
不幸せ要因	過干渉と不寛容	よそ者に不寛容で、変わった事をすると角が立つ。近隣住民と（自身にとって）程よい距離が保てず、干渉が煩わしく窮屈さを感じている状態
	生活ルールの秩序	地域の生活ルール（ゴミ出しマナーや交通マナーなど）が守られず、騒音などに悩まされてイライラすることが多い状態

出典：「地域生活のウェルビーイング指標」における8個の「幸せ要因」と2個の「不幸せ要因」の概要
（資料：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート「Liveable Well-Being City指標」）

西岡：「地域のウェルビーイング指標」のように、客観的な指標（環境、雇用、人口分布等）に、主観的なデータ（住民が何に満足し、どこを改善したいと思っているか）を掛け合わせてデータ化することによって、まちの特徴や課題がよりシャープに見えてきます。

また、データを用いて可視化することにより、すべてのステークホルダーと共有できますので、指標やデータの活用によって、未来のまちづくりに向けて得られるメリットは大きいと思います。

前野：漠然と「皆が幸せになるといいな」と思っているだけでは、個々の取り組みが本当に幸せにつながっているかどうかはわかりません。しかし、主観的指標と客観的指標、政策の関係をデジタルの力で分析すれば、ウェルビーイングをパーパスとした都市経営が可能になります。そういう時代がついに来しました。

戦争や新型コロナウイルス、社会の閉塞感をはねのける意味でも、地域や企業、家庭でウェルビーイングをパーパスとして取り組んでいくことが大事だと思います。そして、皆で力を合わせて創造性を発揮すれば、新しい世界をつくっていける。ぜひ、まちづくりに関わるすべての人で「パーパス都市経営」を実践していただきたいと思います。

西岡：「パーパス都市経営」という考え方を皆が共有すれば、様々な立場の個人や団体が力を合わせ、地域をまたいで連携することができます。デジタル田園都市国家構想で、魅力的なまちづくりの機運が高まっている今こそ、まさに「ウェルビーイングの高いまち」を我々自身の力で選び取っていけるタイミングが来ているように思います。



© Institute for International Socio-Economic Studies 2023
本内容の無断転載、複製はご遠慮ください。